

# 漢字に根ざしたジェンダー観とその影響

侯 玉婷

漢字を用いる東アジアの現代社会では、新聞、小説、SNS など多様な言語環境のなかで、女性イメージが語彙表現を通じて繰り返し再生産されている。なかでも「嫉妬」「姦計」など否定的な語感を帯びた語に女偏を含む例が見られることから、女偏漢字が歴史的に担ってきた意味連合が、現代においても無意識に作動し、当代の性別観、特に女性評価に影響しているのではないかという問題意識が生じる。他方で、中国では女偏をめぐる改革や議論が公的にも可視化されてきたのに対し、日本では批判的言説が存在しても、用字慣行や教育実践の水準では大きな変化が見られにくいとされる。以上を踏まえ、本研究は、女偏漢字に内在するジェンダー観が現代の受容のなかでいかに働きうるのかを明らかにすることを目的とする。

本稿では、まず先行研究を参照し、女偏漢字をめぐる歴史的展開と現代社会における位置づけを整理したうえで、否定性が形成されてきた歴史的な文脈を検討した。次に、中国と日本における女偏をめぐる議論や改革動向、用字慣行の差異を比較し、批判の可視化の程度と実際の運用変化とのずれを確認した。最後に、アンケート調査とデータ分析を通じて、日本の大学生を対象に、女偏や男偏を含む複数の漢字語に対する印象評価を行い、否定的意味を帯びた語が強い否定印象を喚起しやすいこと、またその印象が語義のみならず字形情報によっても補強されうることを検討した。これらの分析から、女偏漢字は単なる表記要素にとどまらず、歴史的意味連合が現代の受容過程において作動しうる記号として、ジェンダー意識の形成に関与する可能性がある。